

# 「斎宮の文学史」

LD09-1018 本橋裕美

## 【論文要旨】

本研究の題目は「齋宮の文学史」である。齋宮研究は、これまで歴史学に牽引されてきた。それは、齋宮という存在が極めて政治的であり、制度や位置づけにその本質があるとされてきたからに他ならない。

私の齋宮研究は、『源氏物語』を通して見出したものである。『源氏物語』に登場する齋宮である秋好中宮は、光源氏の周辺にあって常に影響を及ぼしながら、内側に踏み込むことがない。この秋好中宮をめぐるの検討を続ける中で、彼女の造型を支える齋宮という研究対象に出会ったのである。『源氏物語』研究は古典作品の中では圧倒的に研究が進んでおり、歴史学、宗教学を利用した学際的なアプローチも盛んである。齋宮についても巫女としてのジェンダー論、天皇制との関わりからの王権論など広く展開されていた。そうした先行研究をもとに『源氏物語』や他の物語作品に関する論考を重ねる中で、歴史学の成果を援用するだけでなく、文学に力点を置いた齋宮の史的研究成果を示す必要を感じたのが「齋宮の文学史」という題目を設定した理由である。

本研究は、三部構成である。第一部「上代から平安へ」、第二部「物語の中の齋宮」、第三部「歴史の中の齋宮」と題した。本研究の中心的な論考は第二部になるが、第一部では第二部を論じるに不可欠な、制度として始発する時期の齋宮について論じた。対象とするのは、『日本書紀』や『古事記』で語られる初期の齋宮たちから、平安初期、齋院が創始される時期までである。第二部は、『源氏物語』『狭衣物語』を中心とする平安王朝物語から中世王朝物語までである。第三部は、第一部、第二部で組み込むことのできなかつた、歴史上の齋宮を扱う。特に、齋宮の文学史にとって重要な徽子女王や「齋宮の文学史」として扱いにくい『更級日記』などを扱う。

それぞれの部を以下、細かく確認していく。

第一部第一章は、天武朝以前の齋宮について、『日本書紀』の記述を中心にまとめた。豊鍬入姫、倭姫命、五百野皇女の三名の齋宮が作り出した「父天皇と娘齋宮」というもっとも安定した組み合わせが、密通事件を起こす雄略朝をはじめとする齋宮を描く御代の中でどのような運営をされ、位置づけを与えられているかを検討する。『日本書紀』『古事記』の間にある差異についても本章で触れた。

第一部第二章は、齋宮を文学として描く最初の作品といえる『万葉集』を中心に、天武朝齋宮大伯皇女、ひいては天武天皇の天照大神祭祀について論じた。天武天皇が作り上げた齋宮を利用した祭祀形態が、持統朝にそのまま引き継がれることで却って変容してしまう点も指摘しながら、いまだ不安定な齋宮による天照大神祭祀について確認した。また、本研究は『日本書紀』などの史書に対しては、極めて素朴な態度で書いてあることを受け止めて読むという姿勢で論じているが、本章では改めて、天武朝以後の政治の中で『古事記』や『日本書紀』の言説が作られていったことにも向き合って、齋宮制度を捉え返している。

第一部第三章は、天武・持統朝以後の齋宮制度の方法を『続日本紀』などを通じて確認した。文武天皇や聖武天皇といった即位が期待される皇子を擁した時に、齋宮制度や天照大神祭祀が改

めて要請され、時に制度を歪ませても、最良のかたちで祭祀を受け取れる方法を用いていることを確認した。また、歴代の齋宮の中でもっとも劇的な人生を送ったであろう井上内親王の事跡を辿り、彼女の存在が与えた影響をまとめた。後代から井上内親王を捉えた『水鏡』も対象とし、出来事の多さに対して語られることの少ない井上内親王に対する人々の語らないという選択についても触れた。齋院制度の創始についても、先行研究をもとにまとめた。

第二部は、物語の齋宮について論じた。四章構成とし、第一章は歌物語を中心に、前期物語の点描される齋宮などを扱った。中でも、第一節で扱った『伊勢物語』狩の使章段は、「齋宮の文学史」にとって極めて重要である。奈良の文学と平安の文学の間には断絶があり、第一部で論じた『日本書紀』の問題などはそのまま平安の物語に適用できないことが多い。しかし、『伊勢物語』狩の使章段は、古代、具体的にはヤマトタケルに繋がる回路を有している。『日本書紀』や『古事記』で語られる伝説が、『伊勢物語』の中から浮かび上がるような構成になっており、齋宮が持つ古代的な祭祀形態との連続を見ることができた。

第二章は、『源氏物語』の秋好中宮を扱う。方法としては、『源氏物語』の人物論をさまざまな観点から扱って、秋好中宮を取り巻く物語を明らかにした上で、改めて「齋宮の文学史」について考えることとした。各論に独立性を持たせているため、重なる部分もあるが、同じ場面でも准拠や権力論など観点によってまた違ったものを見だせている。『源氏物語』唯一の齋宮である秋好中宮が抱える、齋宮という経歴、両親の無念、子のない立后という葛藤を整理した上で、「齋宮の文学史」には収まりきれない『源氏物語』の秋好中宮を論じた。

第三章は、『狭衣物語』を扱う。『狭衣物語』は物語中に二人の齋宮を描く。一人は狭衣の母堀川の上、もう一人は嵯峨院女三の宮である。狭衣の母堀川の上については、齋宮を貴種流離譚と見る説を継承して、伊勢と京を往還する齋宮の移動の問題を明らかにした。嵯峨院の女三の宮については、在任中の齋宮が描かれるという珍しさに加え、託宣という他に例を見ない齋宮の特質が語られる。しかもこの託宣は、二世源氏である狭衣を帝位につけるといふ、これもまた例のないことを実現させる機能を持つ。この託宣を下した齋宮が、いずれ京に戻ってくるという点で、『狭衣物語』は語られない重要人物を取り残したままに終わっているという点を指摘した。貴種流離譚としての齋宮を見る上でも後腹の女三の宮という高貴さは非常に意味があり、これらは中世王朝物語を呼び起こす契機となる。第三節では、『狭衣物語』成立の背景と現実世界で託宣を下した嫡子女王の影響力を論じた。『狭衣物語』という優れた物語と、実際に起きた託宣事件が双方に作用して、「齋宮の文学史」は新たな局面を見せる。

第四章は、中世王朝物語における齋宮を四本扱った。『海人の刈藻』『浅茅が露』『我が身にたどる姫君』『恋路ゆかしき大将』は、『源氏物語』や『狭衣物語』ほどには研究が進んでいない。本研究の強みである齋宮論を活かし、中世王朝物語に特徴的な皇女の問題や『源氏物語』引用を論じた。合わせて、齋宮が卜定されなくなる鎌倉末期を見据え、廃絶する齋宮が物語でどう位置づけられるかを扱った。本研究にとって、中世王朝物語はもっともやりたかった部分であり、先行研究でも十分に検討されてこなかった齋宮たちについて迫ることができたと思われる。中でも、『我が身にたどる姫君』の前齋宮は、どの作品にも見られない強烈な個性を抱えていた。『我が

身にたどる姫君』は、「齋宮の文学史」における一つの帰着点であり、同時に起爆剤になり得る可能性を持っている。齋宮と女帝を繋ぐ回路は、齋宮の近くにありながら論じることの難しかった王権の問題をわかりやすく示す。よって、本章の最後に、「齋宮の文学史」の一つのまとめとして、『我が身にたどる姫君』から辿る齋宮と王権を組み入れて論じた。第一部から論じてきたことを改めて振り返り、文学史として位置づける重要な論考となった。

第三部は、第一部、第二部で扱うことのできなかつた歴史上の齋宮について扱った。「齋宮による文学」では徽子女王と規子内親王をまとめた。うち第三節では、最末期の齋宮である後醍醐天皇の皇女たちについて触れ、『増鏡』が描く、改めて齋宮という存在を利用しようとする後醍醐天皇の意志を読み取った。また、後醍醐天皇は密教的なアプローチで天照大神に接近しようとする天皇であり、粗描に留まりはしたが、新たに中世の天照大神と結びつく齋宮の可能性を見ることができた。また、第二章では、歴史物語と日記の齋宮を扱った。いずれの作品も、明確に齋宮に対する思想を打ち出してはいないが、歴史物語が好む密通事件にしても、実は許される密通事件だけを選んで語っているのであり、済子女王と滝口の武士の密通のような憚られるスキャンダルについては語ろうとしない『大鏡』や『栄花物語』を論じた。齋宮経験を持ちながら、異母兄である後深草天皇にあっさり通じてしまう愷子内親王やそれを見つめる二条の視線など、齋宮が形骸化し、その意味が失われつつある時代の齋宮についても扱った。また、齋宮との関わりという点では薄いですが、天照神信仰の面ではしばしば言及される『更級日記』についても、『更級日記』の語りの方と合わせて論じた。

最後の資料からわかるとおり、本稿は非常に長い時間を研究対象とした。特に物語という点では、たくさんの齋宮を扱い、論理を構築した。「齋宮の文学史」に重要な齋宮を扱うため、語り残してしまった存在もあるが、改めて重要な齋宮や齋宮にまつわる物語を位置づけ、影響力のある齋宮たちが更に齋宮の物語を作り上げていく相乗的な「文学史」の一端は示せたといえる。